

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2018 (平成30年) 10. 14

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

「神から離反した人間の悲劇」

牧師 松谷 祐二

創世記 第三章一七～一九節

神はアダムに向かって言われた。

「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して、土は茨とあざみを生えいさせる。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」
(新共同訳聖書)

聖書の最初の文書、「創世記」は記します。神がこの天地万物を、秩序立てられた極めて良いものとして創造なさった。そして、その美しい世界のすべての良きものを享受し、かつ管理する者として、人間を男と女に創造された、と。

しかし、それなら一体なぜ、恐ろしい自然災害が起こるのでしょうか。風が、海が荒れ狂い、大地が震え、崩れ、人の命も生活も壊してしまうのでしょうか。神の創造の「良き」はどこにいったのでしょうか。

聖書はすぐに続けて、しかし人間は神から離反し、もはや楽園には住めなくなってしまう、という物語を語ります。「エデンの園」と名付けられた楽園が楽園でありえたのは、人間が神のまっただき愛と保護のもとにあったからでした。しかし、有名なエピソードの通り、蛇が男と女をそのかし、彼らはその誘惑に乗って、禁じられた「善悪の知識の木」から取って食べてしまいます。それは、神のように賢く、善悪を知る者となることができる——何が善で何が悪であるか、を自分で決めることができ、神から独立して生きられる、という幻想に（あくまで幻想ですが）、人間が取りつかれてしまったということです。いまじくも、一八世紀後半、ドイツの哲学者イマヌエル・カントは、個人の理性を強調し、それ

までのキリスト教会の制度や教えに挑戦する「啓蒙主義」の精神をこう言い表しました。「啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜け出せることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことができないということである。」

近代以降は特に、学問は「疑ってかかる」こと、証明されない限り信じないことを基本精神として発展してきた観があります。実際、本稿の筆者であるわたしもまた、近代以降の理性を駆使するタイプの人間の一人として、聖書を文字通りにではなく、ある程度は合理的に解釈しています（たとえば、アダムやエバを歴史上実在する人類の先祖であるとは考えていません。旧約聖書・新約聖書の文章中では、アダムの子孫が脈々と続いてきて今に至る、と読めるような書き方がなされ、系図まで挙げられているにも関わらず、です。それは古代人の表現方法であり、歴史の事実を記録することよりも、あるメッセージを強調して伝えることを意図した書き方なのだと考えます）。

しかしながら、聖書を通して、神が語っていたもう、とわたしは信じます。たとえ素朴な昔話のような体裁に見えたとしても、聖書に込められているのは、単なる土俗人の知恵にとどまりません。今日聖書を読むわたしたちが、わたしが、アダムであり、エバなのです。他ならぬそのわたしたちに、わたしに、神が、今、伝えようとなさっていることがあるのです。

「神などからは独立しよう。いや、そもそも神などいない。わたしには自分で善悪を決めて生きていく権利がある」——そうあなたは思うのか。わたしの言葉に耳を傾けないで、善悪を自分で決められるというのか。悪い夢、追うべからざる幻想だ。早く目を覚ましなさい！

神はアダムに言い渡されました。「お前のゆえに、土は呪われるものとなった。」人間が食べるのに適したあらゆる良いものを生じるようにと意図して神が創造されたはずの大地が、茨とあざみを生じ、とげで刺し、容易には食物を得られないように苦しめる。人間は苦しみつつ働き、最後は

死んで土に、塵に返る。人間にとって世界はもはや楽園ではなくなり、人は自然を脅威として、身を守って戦わねばならなくなった。この悲しい定めが、人間が神から離れることを望んだ結果でした。人間は望み通りにしただけでも言えますが、「呪われた土」に象徴される自然界は、言わば人間のとぼちちりを受けて、本来の秩序、美しさ、良さを失ってしまったわけでは

この物語は、今日の地球規模の異常気象、環境問題や原発事故のことなどを重ね合わせて考えます。聖書は「世界の歪みは、根本的には人間の問題だ」と叫んでいるかのようです。とは言え聖書は、科学的な根拠や証明に基づいて言っているわけではありません。聖書は地震や噴火、落雷、暴風、疫病のような現象を、神が地上に降り立たれ、歩かれ、触られ、声を発せられたことによるもの、として語ることをさへあります。独特な、暗示的な表現方法です。「お前のゆえに、土は呪われるものとなった。」こうした語り口を用いながら聖書が関心を寄せている中心的なことは、自然界の成り立ちのことであるよりも、人間のことであり、と思います。わたしたちが、度重なる災害を見聞きするたびに「何でこんなことに」「こんなことがあつていいのか」と思う、ちょうどそのように、聖書は、自然界が人間を苦しめる様を象徴として使い、「人間が神から離反したままである。何でこんなことになったのか。こんなことがあつていいのか」と叫んでいるのではないのでしょうか。

物語では神が「人は神と同等になつてしまった。いやいや、これは大変だ」と皮肉を込めて園から人間を追い出した、と描かれます。聖獣や裁きのシンボルを置いて、永遠の命への道を封鎖してしまわれた、と。しかしこれは、「永久追放」ではありません。「好きにやってみるがよい。そして、早く目を覚まして帰ってくるのだ！」と神は願っておられた。神の本心がそこにあったということは、聖書のその後の展開を読んで行くとき分かります。人が神に立ち帰れるようにと、神御自身が懸命に手を尽くしていらつしやるからです。

夏のしわざ

高橋 優美子

八月五日〜九月二日、浅草教会に夏期伝道実習に行つて来ました。東京・浅草寺に近下町の教会とは？期待と不安は昨年と同じです。昨年同様に週報や記念誌を前もって送って頂いたのを見て、楽しみにしていたことがありました。今年は一三二一年。

一三〇周年記念誌に書かれていた、あるお祝いの文章にワクワクしました。十年前、一三〇周年記念品のお話です。『大きな横断幕を往來に向けて掲げ、記念品は聖句と教会に名入りの「しおり」のような、ありきたりのものでなく「手ぬぐい」と、教会の焼き印入りのどら焼きで喜びを分かち合つた。一三〇周年を盛大に祝つたので五年後一三二五年は特別なことはないと思つたが、浅草という土地柄もあつてしないわけにいかず、チャーチオルガン購入と記念礼拝後にオルガン奉獻式と記念のオルガンコンサート、祝会・記念品も忘れない。用意したのは、これも教会らしからぬ一三〇周年記念の柄をあしらつた「扇子」とどら焼き：一三〇周年の記念品が気になる』とありま



した。創立記念の記念品に「手ぬぐい」「扇子」？気になつていました。教会に行つて本当だ！話を聞いて納得！「手ぬぐい」「扇子」も頂きました。そのうえ一三〇周年記



念の品までも頂きました。「デザイン制作意図」として網をイメージしたとあり、「聖書のイエス様は始めに4人の漁師を弟子に選ぶ」「人間をとる漁師にしよ

う」と言われすぐに従つた。漁師さんが大切にしている「網」をデザインした。また、ヨハネによる福音書では、復活したイエス様がお弟子さんに「網を打つてごらん」と言われ、そのようにしたら大漁で網がちぎれそうだった。ところから「大入り」と描かせていただいたと、その漁は大入りで一五三匹だった、一匹、二匹と数えての一五三匹です。一匹（一人）ずつ覚えられて数に入れられています。とありました。その方の文章です。「一三〇周年「お祝いムード」に包まれているでしょう；、そもそも教会は、日曜ごとにイエスさまが十字架の死から復活されたことを記念し、祝う者たちの群れである。浅草教会が創立一三〇周年を祝うとき、神社仏閣が立ち並ぶ浅草の地に、唯一なる真の神が証しされ、イエスさまの十字架が指し示されるのだ」記念誌の何度も読んだ文章の一部です。

夏期伝中は教会の二階の一室で寝泊まり、自炊生活です。いつでも礼拝堂で黙想出来る贅沢です。篠田先生が教会牧師室の本を勝手に見て良いと言つてもらい、嬉しかったです。素敵な銭湯も見つけました。この夏、多くの方たちと出会い・経験したこと、祈られ・支えられて過ごすことが出来たこと、何より神の導きに感謝致します。

報告

* 南部坂幼稚園では、九月六日（木）から二期が始まりました。

* 九月十六日（日）の主日礼拝では、安藤記念教会との交換講壇を行いました。同教会の長山信夫牧師が説教をしてください、礼拝後、昼食を共にしました。

* 九月二十九日（土）午前十一時より、東京神学大学にて、第二十回「日本伝道を担う青年の集い」が開かれました。

* 各献金（熊本・大分地震被災教会支援献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、会堂建築献金、オルガン献金）へのご協力を、引き続き宜しくお願いします。

《各部報告 九月度》

成人会

日時 九月三十日 主日礼拝後、午後一時〜二時半
場所 教会会議室
出席者 七名
担当、開会祈禱 鈴木晋兄
内容 アモス書一章から六章を全員で輪読、当番担当による概要説明。そして多くは牧師の解釈をお願いし、

・アモスによる周辺諸国民と、北イスラエル王国に対する神の裁きの予言と、イスラエルの支配者たちへの悔い改めの要求について学んだ。
次回は十月二十一日、アモス書七〜九章とオバデヤ書を学ぶ。
担当、高橋優美子姉
黙禱をもって閉会。

婦人会

日時 九月二十三日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 八名
開会祈禱 菊池才知子姉
閉会祈禱 全員順次小祈禱
内容

聖書研究「ヨシユア記」二三・二四章
二三章・ヨシユアの遺言 モーセの後継者ヨシユアは、人々を集めて訓示を残す。イスラエルの民は神の約束を信じ、異教の部族に惑わされずイスラエルの神に従っている限り、神に与えられた嗣業の地で子孫が繁栄し、安住していられる。一度神の約束に背いた時、民は、異教の民を神が滅ぼしてイスラエルに与えられた嗣業の土地を失うであろうと、民が守らねばならない神との約束を厳に言い含める。

二四章・シケムにおけるヨシユアの訓示として、創世記から出エジプトを経て約束の地に定住するまでのイスラエルの歴史が語られる。神の恩寵をながしろにして、定住地の中に残っている異教の部族の風習を取り入れたり、婚姻関係を結んだり、交わつてはならない、外国の神々に仕えたなら、災いが下されるといふ。人々は主を選び、主に仕えるといふ。ヨシユアは、民と契約を結んだ掟と法を定め、主の聖所にある大木の下に証拠として石碑を立てた。ヨシユアは一一〇歳で生涯を閉じた。
次回 十月二十八日「サムエル記」を読む。
二、にじの家信愛荘から五十周年記念誌が送られてきたので、特別献金五千元を送ることに決定した。
三、十月第二主日、神学校日に因んで神学生の説教奉仕後、愛餐会の打合せを行った。